

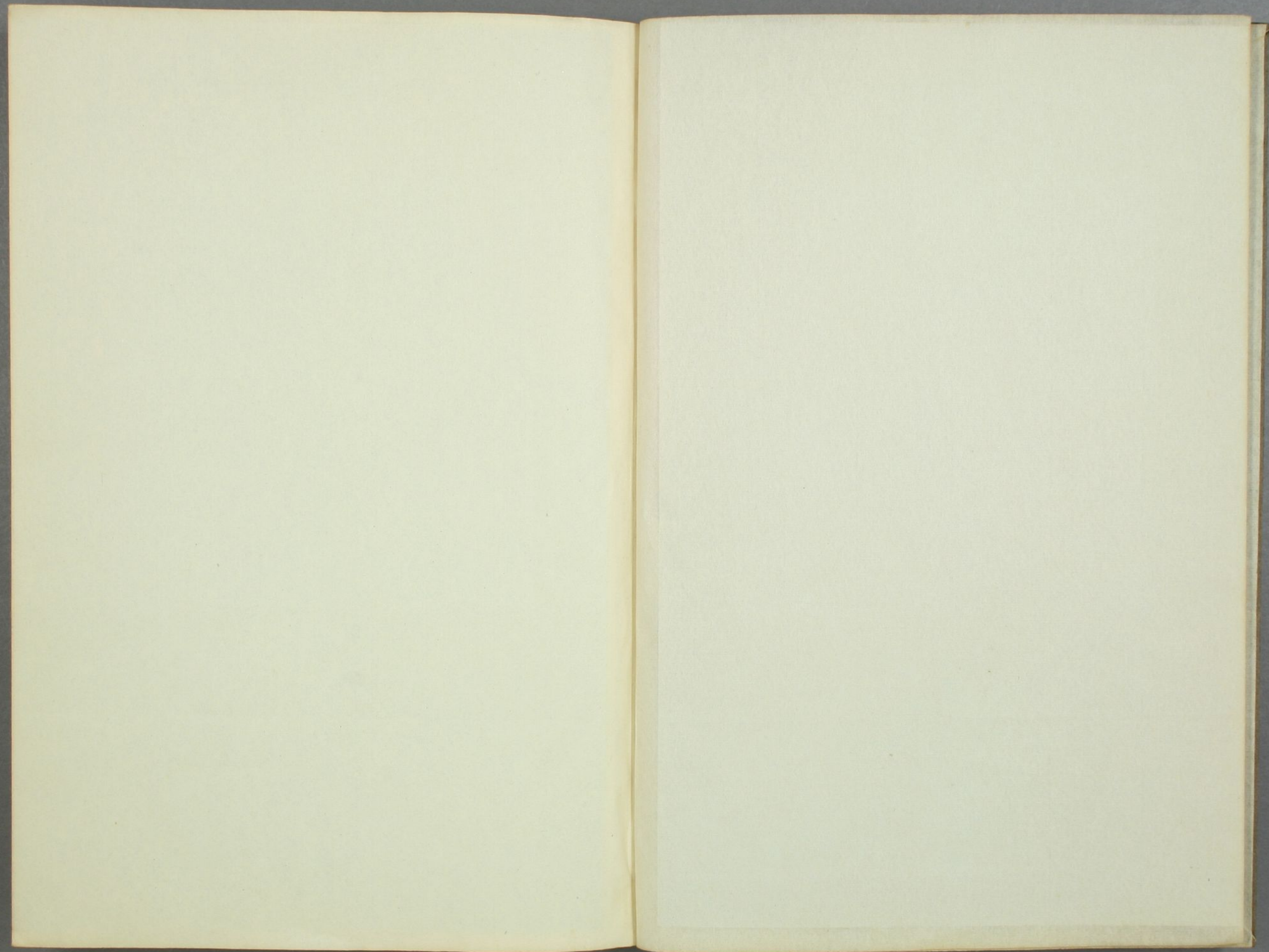
伊地知文庫  
文庫20  
80





文庫 20  
80







宇治葉

春

まきの散り

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ

あつしゆりまきの家へ



宇  
良  
葉



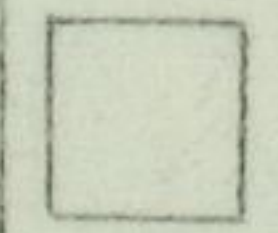
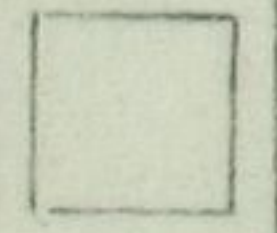
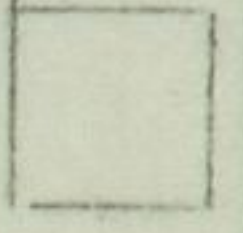
箱蓋  
裏貼  
紙  
宇良葉一冊  
向札三枚

宗祇名判 同向紙二枚  
所々加筆真跡  
同宿  
宗種筆  
宇良葉一冊者

種玉庵宗祇 兩筆  
宇良葉一冊  
向天宗祇名判有之

宇良葉 内押紙二ヶ所者連哥師宗長  
奥判形者宗祇真蹟

内押紙二ヶ所者宗長筆  
印形者宗祇筆  
宇良葉未一冊八  
成





覚

一字良葉小本一冊

了榮極札之通名判

白紙無疑奉存候

本書并外題者筆跡

難見極奉存候

以上

古筆了祐

二月十八日

花押

字 良 葉

伊地知氏書冊

春

立春の発句

霞をもはたて春多の宮この歌

あつまふ侍し時正月百獨吟

物し竹跡も年ハこえけるかすし哉

草庵ふして正月一りふ

若水竹の、とやきめふ雪のかけ

初春のころある所ふて

玉水ふ雪の春しは朝日可歌





東山子侍しとし春竹雪を

たる春そ遊み竹ゆもとのあすかすこ

おなし心を

春きてそ雪をもとねのうす霞

正月九日子日なりし時獨吟を

ひやしけふ松竹おもはん老の春

春竹雪の心を

雪あつて見えぬや高嶺あす霞

うすくたふす可すこハ雪のすそ野哉

池田三郎五郎所より

雪をれて春をうるへぬ水もたし

きえハおし春とハかすめとねの雪

ゆりそめしほとたあのこれとねの雪

浦生形部太輔館より

下もえハ米たむと草竹春野哉

春の発句を

松竹色はあ井よりいほる春野哉

あつまに侍しとき

な見小松いまひとしほ竹霞か形

箕面より正月の比侍し會に



川をとは木す忍お可すむ見山可か

專順法眼坊よて侍し四季の午句に

かほくさへ楨つ山の夕可那

霞のた、汐を

我身ちてきろやうす物はる霞

おなし心を伊勢

山もとの杉子むとつ霞か那

おなし所もて霞を

かすくさへひく山ぬかき宮木哉

渡辺の天神子万いりて梅の

ちるを見て

風子梅ちらぬ花とふにほひ可那

むえを

かせはよて句ひをちらせ梅ち可那

おさなき子をワ可れ侍し人の

名号連歌せしとき梅を

何るわくちよはにほひしむえ花

梅の発句の中に

むめる香の可す見吹とけあさ嵐

梅さけハるほハぬ木々の風もなし



おほ梅にかゝるたもとけ子ほひり

四方にふけ梅さくやまけ春の風

空にたくにはひりかすやむめ花

飯沼丹後守許にておあし心を

梅の、に天々下風春なまや

あつ万にておなし心を

かす~~む~~江ふむめさく宮のまのき哉

むめあゝをふあハ身にしえあさ嵐

木々ト梅花をなうハ花匂ひあふ

草庵にしてあすきを

霞あつとを山のこ宿のちる

おあし心を

うち休へて世は春あすく風もあし

山崎津田新左衛門許にて

水をれて山のこかくはあすくそ郎

渡辺ふて春比侍し會子

あすも見ん松子おほえの夕あすく

和泉塚あして

かほめるやうくすく江の浦の松

あすきを



とを山もけさハめお多う霞かな

將軍家の御會ふるいろへき

よし侍りしとき春日を抛明

神ふ立願志してまつるとて

朝なけおさしそふ春れひり可那

播摩にて浦上美作守興行の

會ふ

梅さけハ世は見な春の色香可な

春れ発句の中よ

むめ可枝にけさうちそへよ鳥のこゑ

梅るゝに山口志ほしほな春

池田兵庫助所にて

葉先いほくよほハし去て、風もほし

むめ可ゝをを去てハ露れ柳可那

月に梅香こそといハん袖もなし

伊波をみん山ハうす雪う去霞

鶯のは風もあさきやなき可那

うくひ去やをるてふこゑのあや鳥

伊丹兵庫助住吉法樂の會に

かりもなけなきハ花さく春れうこ



池田兵庫助正盛許にて春の

登句に

柳よりふたやなるとひしを流る風

川原林六郎右衛門尉とにて柳を

門田遊く山みつふるし柳をけ

和泉堀にておなし心を

門出との見おたしとをまやな哉

山田下馬橋のあゝ玉よて侍し會ふ

駒とめてはしにのけふむ柳かな

青柳ハめ子見えぬ風の姿うふ

春の発句の中よ

山可すしやなきふかろ河川辺かな

水ぬるし柳色はく川へ可耶

東山より柳を

ふと川の木末ともなきをなき哉

赤澤兵庫助の所にて侍し會ふ

あさ露をやなき可枝の色香哉

ある人不例の時午句侍しあ

柳を

春をへて玉比を遊く柳可耶



伊舟筑前守許りて

さるせてと花も思ハぬやなき可か

やなきの発句也

若髪にのぼるハ遊き竹柳の郎

たえゆくは春やをた巻ぬる柳

千坂對馬守許りて春のころの

會に

春の友ち起りハ柳さくくら歌

春は月を

はるけ色ハ見えてくもとぬ月も可か

あさほらけ月おかす万ぬ山もなし

あり明に春は夜ふかしあさかす

清水法樂とて人の申侍し

春は月を

月おけさあすをとおとせ瀧はこゑ

浦上伯耆守興行也

旅としも思ハぬを海乃山路か歌

春は発句也

先さけと都をやまつ山さくら

峰は雪すゆるなまちそやは櫻



花をまつ心を

まゝて見ハ花やと山の登りさくち  
さゝて先あらしを待つ世春の花  
花やさくおも影はほかあさあす

花々発句の中に

さくを見よこやこハち那北山櫻

海辺にて侍し會に

磯なむ北花はほるるか登はさくち

杉美作入道もとにて侍し會に

風好ぬ世になまされそ春の花

花々発句の中

ささるすかさめは花の梢の那

おとし心を播摩にして人よかハリて

春いく世松はあひ生北山さくち

阿る人々法樂に花を

ひらけきぬ種や天地代々花

おとし花々発句の中

雨ちれてち那雲そか夕日の那

さゝぬ万とおもぬ花を春乃空

浦上美作守千句志侍し花を



をよふ色には時もなしを依り花

藤澤清浄光寺に在りて

かりしと云

はあや雲入見ちあろ我けさの月

もろともお老る人此世し會り花を

をなまよ契くちちぬ老木の那

春北発句

人志と此身はるなあれや八るの花

はる雨よぬあや雲や空る櫻

よるや雨を露けきあすかす

いと櫻見まはを眼きくやあきあ

あけ白へ花を雲の夕月夜

時はいはまなゆ世なれや風もなし

芳野の花見侍しとき

見よし野の外にハ花の山もなし

右京兆亭の千句に花を

よほも見よ戸さしせぬ世の春景色

花北発句

一とせは風やいまふくまかきあり

松尾神主の亭にて



櫻色の衣手志は我宮木可取

鶴岡八幡宮の神主の許にて

も法人ハ花ヲ老チ汝宮木の耶

春北発句の中ニ

山見えてかすむやち奴の朝くもり

海ふふよ雲こそよほひるますく

九重北望山も花の雲井可取

空を見つるほひハはたの千里哉

おほひそふを取ハ見し世の千しほ哉

かたき花たつねハとを起山もなし

花ふきてなを雲みちけ深山哉

ゆるきとあうら見ん花の山路可取

おりてたにい<sup>ま</sup>うぢちあ<sup>の</sup>へき哉

見はハありいをんハおとし山さくら

櫻かりやまも宮このゆき、哉

能因法師入あひの鐘もとあ

ける寺に花見にはありて

見まは見ぬ春さへくやしなす櫻

花見よと人のさそひける時

おもひやまよハ、ひと木ははるの花



おる人の可通るも花乃あはへかな  
見る人に風ハをくれよ花さかり  
花の心か通るはあへは山路の那  
多ひ人も花の身をなほ山ち哉  
花のほり水いさきよは深山のあ  
山櫻あすえもを眼乃ほひうか  
花の又おもふあゝあきミやまかな  
二條関自家の御會に當座よ  
あけたるき度や雲井のやま櫻  
ある人の亭にておあし心を

花を見ハ千代もへぬ通き木陰哉  
但勢二見浦るて花之侍し時  
水にほふ入江をち取乃もと可か  
伊勢にくより侍し坂上りて  
多れとなき人を眼を一枝心まし  
侍しをたゝおほあゝとおもひ侍しに  
発句を所望ふ侍しあハ  
おる枝やあゝハ心乃ほるれちな  
書字乃寺のほり侍しとき  
おりそ見ん宮こちあくは山櫻



花の発句のなるよ

櫻いろよそめぬ袖なき宮こり

ちなすかりよはひハちちぬ袖もなし

すこし地まき色なきほとの花盛

又やみむ花よあす露ゆふやすと

ちはまてと見ぬ人やおほ花さかり

寺井伯耆入道宗功ともなひて

花見よはありし子飛鳥井田相う

つ万すまてまいりあひ登かて

桂宮院のち取れもとよして勸盃

なと侍しと我波御詠ち取

見んとた、おほるよにきそとも

か、は木可けは友よ取ちめや予

に発句つるふつるへ我よし

うけ給て

ゆけあらしけふを待こつ花さかり

花は発句の中よ

をそくとく咲てをくうせ春の花

春は口の木すゑ子くうせ櫻ち取

う川ろふか花子見さりし夕かすく

附箋  
夏の暮に森左衛門尉  
盛家詩一傳會に



地きはきくとミタヤおも影春の花  
まちてちれ花にかこゝん風もたし  
せる跡とおもなめ花の宮こゝな

坂本井上坊子して春の末  
山やありしは春のたゞつ春の海

上月遠江入道の亭にて  
をそくときをなハみのこは人もたし

水迎の落花をみる  
くむをり花よは風のみきハ可那

おなゝありまよて會侍しよ

青柳になくこはを友のみきハ可那

ひまの山より所望は発句に  
さけをちり散しゆく世の山櫻

ある人所望せし発句よ

地とハふけ花ハかこゝし春の風

春の発句よ

たるいへを風もよきけんをそ櫻

春雨をしほし花の名残哉

はるをそな花よくちせる木草哉

をそ地きは秋の可ちまゝ若葉哉



選日を

なわき日ハやま鳥のおのり、み哉

能勢源左衛門尉宿所の千句

鳥蝶子くささぬ日なき春野哉

春の暮の発句

池をみて藤をくちよし岩初松

水あらしぬ岩あきあちやはるのな

江州日野牧

藤は、しはかゝ岩あむ山路かな

新善法寺にて詠、しの

さかりみ會侍しに

岩は、ししいな、こと葉の色もなし

暮春の心を

なこりあきやあす、此夕春の暮

三月盡

地るかゝりあはをしへよ花の春



宇良葉

夏

あツのハしめろ発句

花やゆみいはハとおもふ郭公

種子嶋右兵衛尉京よのほり

侍りしとき

ちきりきやハつほと、きり遅櫻

種村三河守屋とりりて

こゑをなむる山いつと時鳥

郭公の発句の中

ほと、きりこゑを心のなつ音哉

武藏のみとし野みて千句

侍し

よほとなけあさぬく雲の時鳥

徳田六郎左衛門尉許りて

こゑの色ハをの音やちしほ郭公

摂津國をの山の山をこぬ

とて時鳥をきりて

ほと、きりなく音をつかの山路哉

郭公の発句の中



まつ人を志すはあて時鳥

いりてまほふとハリすてよ郭公

思ふかゝありともわくなほと、きけ

人成てもなと一こふそほと、きけ

專順法眼なくなりて後專存

法橋坊みてほと、きけを

あゝさ五し古こふうつせ郭公

近江よくたりし時湖迎にて

月そ舟タワゝりせよ郭公

海つちの旅ぬゝ時鳥を

わさりせよ雲おる嶋やほと、きけ

おなしこゝろを

音城そよ雲ハハ重<sup>山</sup>ほと、あけ

浦上美作守和泉堰みて興

行の會ふ

詩をそへて名城毎かくせよ郭公

時鳥かゝはきはきしし聲も歌し

ほと、きけなくゆ木々かき山路哉

日野の牧ふ下侍しゝ山ふか

きとちろりて



鳥もなうぬ山とおもぬなほとゝきす  
まろくせハ山路ともなく時鳥

新樹のあゝろを

山あひのをつしほ志る若葉哉

わきつをさを

かまつをさ花み水ぬく川魚哉

上杉相州亭の月次も同心を

色を露ハあゝ洲の杜若

卯花を

春草ハうの花うき乃外面哉

うの花み月雪ハみつ春しな

卯花の月にさハらハ雲しなし

卯月のころ豊原寺にて侍

し會に

夏山ハいらあはありを木ろ才哉

大内京兆はき山の亭にして

この所のさはを発句よと所望

侍しとき

池ハうえ木すゑハ夏の深山うな

榎並三郎左衛門尉許して卯月の比



たつ乃池ハ梢も鴨乃青は哉

細川阿州五月ハありに千白し

給しとち

山やいまかゝりて初音郭公

題しとち

たつ山ハいと水ヲおちて瀧もたし

水鶏を

天の戸を月ヲほかする水鶏かな

夏の発句ヲ

道比へふさけちやあふ地花乃友

豊原西芳院にてたちはあを

桶子えなきてるほく軒の松

齋藤又四郎許にておなし心を

ひまかほる風やたちはな玉すたれ

早苗のあしを

うふる田子秋可世いそけ岡の松

小早川美作守館にておなし心を

若菜を色ある田子のもすそ哉

廣田社のあさりにて又同心を

大御田子ゆきも取あへぬ早苗哉  
月の比



下笠三郎兵衛尉秀忠興行  
うへの不る里ハナサマの山田かな

神保能登守許りて侍し會  
左ふさかぬ竹も。若葉ツボムか那

住吉のあさりりて五月雨を  
五月雨ハいつく志不ひのあさ可か

蒲生刑部大輔館りて  
雲はよひある風さむき五月かな

寺井伯耆入道宗切の空とりりて  
をふ乃春ふあやめもわかぬ軒を哉

能勢源左衛門尉許りておあし心を  
あまひしくあやめも旅のあり袍哉

五月のころ平泉寺にして  
あし乃のころさ月を雪りあまふ可あ

伊勢山田りて神書のあゝろを  
多子忍し不たるかけあき朝日可あ

夏の発句共中  
をし地可く夏やあまち北夜半は月

専存法眼坊りて  
明やすきころとやいてし夕月夜



越中國にて万葉の心を思ひて  
なつしこに雪嶋みきはほさこ哉

夏の暮に

日をさへて秋を吹こせまらの風

越前府にて侍し千句に夏月

ひありきへ月を玉江のゆふは、之

日向國伊東民部太輔旅宿にて

月やけさなとにす、しきみしの海

栗田口にて伊豫法印の月次に

夕立を

遊ふ、おとあな、つ山のちかきかな

周防山口にして

夕立にみ遊る草木のたし、詠可那

越中新河郡にておなし心を

ゆふ立の新川な、す地また、あな

豊來寺にて

くもりさぬ風や夕立と詠、あな

二條関自家にて千句御會侍

しとき、

と詠袖もうす物、ほかあな、きかな



おなし心哉

秋可せもそてよりうこく扇あな

月哉けさたもと子可へ書あふき哉

焮またて扇にきよけ萩のこゑ

題しと次

立はしあ世ハこなあさ北よもき哉

ちち心哉

蓮葉は露くも玉なまか、みかた

太田左衛門大夫道灌せし會子

はち心葉もみきハ子う法む句ひ哉

宇佐美加賀守家にて

江のこゑも子居おやはちす玉簾

夏は発句子

蟬のちも夕日子をもきたもとか那

長尾信濃守林泉寺にて所望

ありしとき

あつに <sup>あつに</sup> ひ、ち雲子みなさる泉かな

おなし心哉

かけ子せく泉やあらし松のこゑ

長尾信濃守家にておなし心を



まら風よくあせて涼し石し水

河内國中振弥九郎重行許りて

明け帰る川可せ遠くし岡のまら

西宮りておなしあゝるを

名もすしきよお諸の玉わしを

湯河安房守のかさへ流るハし

侍し獨吟此発句

かけすし猶木たる、れ小松原

納涼の心を

秋やあむ風もよしおけ朝す、

蜷河修理進伊勢法樂の千句

もすそひく夕河す、し柳かけ

おなし心を

露す、し風ハひもあゝ玉すたれ

三上彈正忠頼安許にて

糸あゝてむすおや志水柳かけ

いをほよりくたけて涼しさ、れ水

越中小津にて

雪子なまか廻りてはくしこし北海

夏の暮子



おきはまゝ扇ハありけ風もなし

水無月子人の雨あひし侍しとき

夏とすほとふまの水なき月の雨

加賀國山川三河守許の會

氷室を

見こしちや宮こ地可くハひむろ山

おあし心を

水さむき山を氷室名残哉

文屋康秀の末孫赤井綱秀許

りておあし心を

上野國

加氣すゝしむへ山風の宿乃松

御後乃あゝろを

八重雲もはたふる月を御後川

連歌の誓古とて人の千句

志侍しよおあし心を

あとの葉もこの輪をたえと御後川

こしちよ侍しとき

みえちしてけふそあし地のあつ海

御後川あきやたちし乃朝涼



宇良葉

秋

妹乃をしと此発句

ちるやいつ風も吹あゆぬ一葉のち

地と松木と一葉をちわき嵐哉

越後舟をて人の万句を侍し

散きハ、ヒと葉や秋のみ友と舟

草庵の會

地としてもなそあとの葉の古柳

和泉堰

ちるやあゝの風ハおきぬく柳可け

萩乃発句の中

はちてふけ夕を萩の朝あらし

松風もほろいつる秋を萩のこゑ

羈中にて侍し會

萩をやとの風も朝の山路哉

を衛葉に在るをいくゝへり庭の萩

き夜可せも今朝や有明おきの聲

初秋の発句

桐の葉をま地いて人鳥や雁はこゑ



香宗我部出羽守會子

きりた葉子きけは色なき雨もなし

七夕発句の中に

なみのみや水もちぬちきり天川

江州まくり玉し時(並カ)並木石見守

もとて

ゆふなみに月や岩こすあふれ河

上杉戸部亭子て

天川月さへあひにあふ瀬うふ

住吉法樂子七夕を

ゆきあひの空やよひの子秋は星

天川おもへハふかきあふ瀬う那

地りきめし一葉やほしのむるひ舟

河。辺の空とりて侍し會子

ほしを見しうね木あなくのふし柳

初秋の発句に

吹むさへ露やハおきけ秋の風

藏集軒子て秋のをしめ子

露ちちぬみとりも琪の木末うふ

文月ハあり子逆巻出雲守許子て



秋かけて夕しつ雲や夕しつ時雨

紀伊國山口といふ野ありて

あきとふく松風すゝし夕月夜

越後若延命寺ありて

ほくしきハ水より夕し秋の空

浦上美作守下京に侍しころ

庭にせけ名も堀河の秋し水

ふ月乃こ浴

露をみてそむるもまゝぬ草木哉

ちしめて武藏國に下侍しころ

むすし野はあやを花のやとり哉

萩を

露やおる風をおまちそ萩あはな

西行法師宮城のいはを慈鎮

和尚ありたてまつりし其種今も

のこり侍る哉草庵あり法し

をき侍し子花もあはれその國の

人きたるて會侍しよ

露けさや宿も官城野をあら花

秋乃露句此中よ



秋なるを おきこすきめく嵐哉

鴈そなく萩もきよくや天津風

こゑほ<sup>を</sup>子鴈もけさなけをなす、き

阿さ霧けう花す、き風もなす

秋の日や袖<sup>袖</sup>にいろの、花さ、き

羈中子野水のおもしろ

きをみて

なまあさぬ水をおほある末野哉

むさしれ、あしりに草庵を

あすひししり

虫もすめをなのみせゆふ草花庵

草庵みて

とふ人をけふ花れ、秋のいほ

あさあほを

年のうちははあやあさあ不一盛

阿さあふも長月あけよをふれ露

秋の発句の中子

あきの色ハるハるもひとつ草葉哉

尾崎佐野跡五郎許子

ふきあハす風やちま松庭の萩



鴈もなけをのち山の方月夜

あつまゐて秋のあろ

とぬ鴈もふらぬ雲のや富士の嶽

越中放生津よて神保能登守

宿所乃會よ

夕とれ月今朝秋風北あこ北海

遊佐跡九郎館よて千句よ

戸きしをぬ世子八月とぬ里もなし

月の発句よ

影うすしあつと木の方空の月

八月十五日

草も木も月まつ露の夕かあ

名月此発句よ

心あつて月みハ秋のあよい哉

長尾三河守登とりよておあし

く名月よ

のこは身を月よかこよぬ今夜あ

おあし心を

一と勢のかけや今夜よよる北月

名月の夜よ、ひとり月をみて



秋こそと見し夜やこよひ空の月  
名やおもふこよひくもらぬ秋の月

十五夜の月蝕子あさりしあき  
名をはえつ今夜ハくもれ秋の月

月哉  
志ろよへのひかりや月々あきゆ袖

遊佐弥九郎館の千句  
いほよりとおもふやひかり秋の月

おあし心を  
久あさの山いゝはあり空の月

をはずて乃月見侍し子小林  
といふものみち遠くむかへ子  
きりり侍しそま

雲きり抜おけし月山路哉  
月を

けき見よと待りやおけし夜の月  
伏待の月を

あよひとてねてやハまらん秋の月  
土肥興四郎長信許りてまつあ  
此月を



名も志はき廿日の月の雲間哉

おなし月を

あさ霧二月ハ夜あふる川辺可あ  
うすきり此月也春の夜朝ほけ

宇治にて秋の暮五人の所

望乃発句

加東也雪山をり、又此秋の月

野分の発句中に

左方にいむ比也野分もあさふめり  
花下な城おほふ袖なき野分哉

うさくあき地るハ野分也下葉哉

豊原寺にておなし心を

むら雲はほふ也野分もねの春

ゆくあらしかゆるを松はく下葉かな

周坊(三)侍しころ秋の発句

あ、しとてなきしハあきし秋の水

越後関の山も水おもしろき

坊にて

水にさむ心やみ山あき此庭

上野國赤井細秀許りて千句



花鳥ハうとみんあきけ夕可也

題しと喜

鴈のねも霜に色こまいな葉哉

筑波山子此ほり侍しよその

寺子て

や才たうと雲を吹そよけ秋田哉

筑前隼人のわたり子て

舟みえてきりもせとあす嵐かな

丹波神尾寺子くましとき

山路のあそろを

雲子鴈谷子をしなく山路チ哉

秋の発句の中子

松の色をあらしをあきけ千しは哉

うすくこくせめよ木末の秋け露

松の色も秋子ハあへぬ下葉かな

富士松の紅葉したるをきて

松ひとりふしに時しは紅葉かな

吾妻子て海つちおもしろき

こたり子て

赤川の葉や秋の千し不れ遠ひるた



上杉相州の亭にて

風もねよ夕露此こは朝かした

もみちせハいほま深山の木々此露

染てまづ心や木々のなつ時雨

武田豆州の亭此月次子

左のかり此こゑやあゝ染木々乃秋

浦上美作守有馬湯子入侍し

とき

榎乃葉ハそ此色を秋乃時雨哉

はくしへくしりし時菊の高濱

をゆくとして舟中子て

ちちなちぬ万さこも菊此濱路ち哉

菊乃発句此中子

菊にいつをきそめし露そ谷の水

きくさけは野ハうつろハぬ花もなし

花此ぬんしも星とをし秋の菊

日光山くろ髪山ハむろし仙家

みて侍しよしき、侍て

くろ髪子世越えし山や菊乃かけ

題不知



嶺ふえて菊にかりなくやまち哉

十三夜子三井寺にて

あまひ月あるつきをまつ秋もあふ

豊原大深院にてお存し心を

名をえてもみちぬるや心秋の月

紅葉乃発句の中よ

色をさへるやもみちの露の宿

とりもあふぬ(帯カ)ハ嵐のもみち哉

千しほとや露ハそめけんうさ紅葉

露や志はいつき昨日のうら紅葉

秋乃発句子

ゆふ通とし山やあふきめあさ時雨

紅葉乃発句の中よ

やまひめのおもハぬえよ薄紅葉

山にて一念三千の心をみち

子よ夢て

千、秋色なるも一本心可那

鶴田をはしめてみ侍し時わか

きをのこふりありていつき

発句を所望し侍し時當座よ



山や雨ふるくさお井の秋は水  
いまひとりの若衆のためよ  
や万枝もやあまの嵐の下紅葉  
あはれにして九月盡す  
ぬきをく可秋ハゆく野の可と錦

宇良葉

冬

十月一日乃會ふ

きめし山ありともけふや初時雨

初冬の心を

めぐりきて影も去くる、月日哉

残菊乃出、ろを

きききそふ秋なき時も阿さ北菊

時雨を

雨いつき風ハ去くれぬ山もなし



下京百川入道の許まで

あぐれにも宿ハのとけき宮こ哉

千句よ

夕時雨めくらはさ夜のまくと哉

鉦前國芦屋の里子やどり

待しとき

いつきむあしび月夕時雨

難波まで折ふしれいひきて

よ

松風子かねもあぐる、夕あか

遊行上人ひさちにおハしまし

ける比はるかなる山路を志のき

まいり侍しその時の會子

袖にみよ時雨子流きし山めぐり

箱崎神主の家にて

松の葉子おあし世哉ふる時雨哉

やあきは不ほしきところ子

て一座侍しよ時雨を

過かひき時雨を宿乃かこと那

日光山一見のとき中善寺



子ておなし心を

志くする存と雲に空とあるた可祢可お  
いよつち子松も志くれぬととりか友

志くれきやさ夜の嵐の朝くもり

森左衛門尉盛家許して侍し會子

あさわしは祢ぬ夜志くると軒を哉

入江左京亮宿野子て

まちてちれ又口時雨のふ雪紅葉

草庵子て侍し會子

木葉もる軒ハかこくんと雨もなし

落葉の心を

花をさへおくれぬ風の木々を哉

まつちるは心のあろきこのちか友

池田若狭守許して侍し會子

あさ霜の木乃葉におもき嵐哉

高雄にて神無月の比

あらしにもほのせぬ瀧のおちを哉

それとなく木ハうつもろ、落ちるお

色ふあきこの葉の庭ハ塵もなし

吹すてよ落ちを庭此朝あらし

おち葉せしこす衛子依もる嵐哉



新田礼部乃亭にておなしく心を  
雨とのみちりしも志多きくち葉哉

長尾下總守興行よ

せく水を氷よゆはる朽葉かな

中嶋三郎九衛門尉月次よ

色くツる野や山ひめ北すて衣

冬乃発句よ

花よりみめ可きぬ霜の木草哉

こかししよ吹をつるはふの嵐可か

木枯の心を

木かししる吹や志く葉は松のかせ

白川の関見侍しとき修理大夫

入道亭にて

木枯よおもふ宮この青葉かな

おなし所きて侍し會よ

山に遊る時雨もたひの雲路哉

かくて同行又おこけ関をたち

わあき可へり侍しよ又いつあ

はなとるな人過りてあして

予に発句つあうまつるへきよし



侍し可ハ

袖よりな時雨をせ起る山路可取

冬の発句の中子

そめくく木枯子なるあくれ哉

秋を、きて露ハ可き此、あしと哉

尼崎釋尊寺にして

神亦月う照ハつせなき松もあし

を起そふ可猶あさハるし霜の松

深山木をふゆは心の可きしかな

西芳寺にてある夜人々とも

なひて舟りて月見たとし

侍しとき

水きて月も岩も後木也万哉

おなしあゝ海を

こほり遊く月ハみつなき空もあし

おろや月あともこほり此朝の、え

可けなちぬ氷もきよし月の庭

月うすしくもる枯野、朝しめり

阿さほりき時雨子めくは月も哉

能勢源左衛門尉千句に冬此月を



きえのほる月八千里北高詠可ふ

冬北発句子

空にたあくく氷そ玉阿とま

よるや雨うつなき度の朝にほり

うすこほりとま忍ふほしき鏡可那

友と見ハこほらぬ水北あゝ詠可那

川をどハ霜子こほらぬ深山可那

池田若狭守のやとりよて

水志ろき度ハ雲乃名残哉

霜あさの月よゝつなく雲乃哉

吾妻にくゝましとき鳥をと

云野子て

こゑとけて鳥なく霜の朝日可那

和漢発句子

冬北色をいつとなくやハ峰の松

青蓮院殿御月次子

ちろ雪子松の葉おしき嵐可那

神お月子大内京兆の月次発

句すへきよし侍し夜俄子

雪のぬりけるを明かゝ子思案



の発句さためてわいるへくやなと  
申送ふれしあした

けささるや嵐ふきし夜の雪

遊きをまわつちるを

ぬりをへてしつ宿とはんこねの雪

雪はをしめてあり侍し時れ會ふ

きりみたり花の雪ちる木末哉

いりいくる山のはみ見む庭の雪

堀川わたり妙満寺にて侍し會ふ

山は雪いくるみきはるうす氷

遊き晴て鳥は音たあき木末哉

乃こせ雪むきのすき峯は松

あはを遊き松のいとハ人風もなし

ふけあらしつまハ松の雪もなし

吾妻子くくましとき宇津宮

下野守館もて

池をきて山水さむし雪のかけ

武田光録ひやしやまに嶺たあ

き野の城もて侍し會ふ

甲斐のぬをちあや宮こは雪の山



出羽國の人達哥北心さしお可く  
て數日をへて越後まで尋侍し  
其人のせし會子

袖乃雪子ぬかきほとしは山路哉

あいの子浦山をけて景おもしろ  
きわたりりて侍し會子

山をけて舟よは雪木北万可な

伊丹兵庫助宿所にて雪の発

句子

いゝお茶ふくありしそ雪木むちのし左

持是院にていなを北山をか、  
又北いをあるよしをき、侍り  
て其會子

雪は多、やまは塵あきか、と哉

若狭小濱にて侍し會子

ぬりの舟を山松をき波乃雪

とを山乃雪もなひ氣窓竹

西國より去は人千句すへき

のよしありて所望侍し時

箱崎歩明不のいゝを遊き竹松



題笈五帖

霜をへハ雪子もいくせそなれ松

草庵の會ハ速懐のあゝ流を

雪たまも山ふりくなせ宿の松

摂州兵庫よりある人所望し

侍しとき

雪やなゝ松花葉あしりしは原

鈴木長敏の許ハ尋ぬへきほど

すきて雪ぬりし比まありて

今日ハ後や心ハ召集し宿は雪

春をまつあゝ流を

左のハ雪あま見をおもふ木末哉

なめつゝあとしも雪の梢あり

神祇の発句ヲ

霜ふけて星のあゝ流すむ雲井哉

早梅のあゝ流を

雪子むめ春をとを、はぬる枝哉

<sup>(さか)</sup>あぢてまてはるやいそらん梅の花

草庵より早梅の心を

人またハ冬そきかまし宿の梅



年々内乃立春の心を

猶きくは毎つやうらみむけふは春

歳暮は志、詠を

遊く年不春日ハありは暮もあ耶

空子見よ月日ハくは、年とあし

世ハ春不うつるもおしきことしあ耶

武田光録亭不して極月は末子

雪やむ久こは花きをぬ木々とあし

(附箋)

発句之數

春百五十一夏八十六

秋百三冬八十九

四季分

已上四百廿八句

明應九年予やそ地不えちて

會席のゆしハリと、女侍るうへ子

猶さりかゝき事侍りて詠可う

万つまる発句正月二日草庵にして

あきて見ハ山やたる春あさ可すこ

八幡於梅坊

梅ハ毎、句ひをち町の午しほ哉

能勢源左衛門尉許不て

染ハ砂つやまハかすこは阿さえとり

きよてえよ花やハと枝き木々の雪



景瑞庵子して俄に會侍し時

白へなを待つ花をめぐらすかすこ

振州上官の月次子人にあかりて

見や万木やはる世色種をなすかり

池田兵庫助宿にして

雲鳥もはか子閑いつるみ山かな

伊丹大和守宿野りて

去年こしやうす花さくちはる乃色

丹波國南昌庵子参上の時に

長老乃御発句

雨晴て花は雲をるたうねかな

翌日

花子入やまはあ、落ははてもなし

河内國出口東吳庵にして

はおおちて名残かろはしはるの草

湯山子て浦上美作守具行子

地きハサ起ぬくはともいく世花の春

山崎津田新左衛門尉許にて

竹の葉も若苗なひく門田か歌

蒲生形部太輔館子して



夕立やあえし岩ちとあまの川

春日左抛御前法樂

何路

朝なけいさしそふ春乃ひありか取  
むえうち可ほり雪とくはら  
登まもや於川そひ柳風吹て  
む可ひのむとそ舟わらるえ遊  
人さハくかり祢の月や明ぬと人  
道遊きかり子はと娘と露  
かいはとよこ萩あほる野へまきて  
むしのこえきく日はくせよけり



山可げや風もとまらぬ草の戸子  
つらむほとそ雪子見えぬ  
年ハまゝ若木のまつの可くぬきて  
あ可くよハいこそおもひしは  
末とをくむ可くし契りし人もあし  
何なあるものを何たのとけん  
あはれ、牙ハ風まつ雲のわおき路み  
月も多くいあるあ可くつきの山  
天つ鴈よるた可くた可くぬこえわひて  
時雨ふつる何なきのきむけさ

露さへやわかたむ里をあかす人  
おもひ夜をきそらき世なりけり  
ちとれとも見えてん花ハあき物を  
いさきくらとやわせハぬくらん  
なく鳥た出し、落もあらあ春くれて  
かた見を野へいわくは可くり人  
なは罪のみちはあらはあらん  
とをしと後の世を歌おもひそ  
行末は老をハまらしあかいのち  
からすやすらへいるぬるきと



たのむ夜ははた深き月をこて  
とふやときけハ秋可ちそふく  
を新すき君可うへしを思おらん  
おのへのやれあとの可なしさ  
山好かき雪を鹿の可分分て  
遊ふへ乃雪のをちれ多ひ人  
又かこころかへるを見ても戀しけれ  
つとまき三とせきをなくはちる國  
あまれ子のおやの別もいり許  
阿まれ子けゆる志不あまの浦

水さむき川原に秋の日ハ暮て  
ひささおち地にか山かあけ  
霧のほろ木末に風やこはらん  
野中のさど八月もすさはし  
狎なくあしり草れ枕して  
たいつのれ方の夢をたし見出  
多のをくはこれ一筆をおぼつかな  
やハしとこそハわさしいひつき  
花子なと去年れ嵐を忘るらん  
はるれあ葉も多、秋の山



露かきむ柴火い存りの夕暮よ  
月よ口こけの袖もあはらん  
さてし身ハ後<sup>なまをり</sup>夜子ね覺して  
きりよも後のやえそりあしふ  
あひしあハ思ひもつきねむねの中  
人共つきなき世をもうら見し  
數なりてなきけをむもいあらん  
アやこ共泣て子あハ泣やまさど  
たつねよと花よやはあふこねの雲  
ほのくくあすむあけのたろ空

さえし夜北月よ春風又ぬきて  
ふねをいたせハ雪そはるけあ  
ぬきなれし竹共とほりの朝はよき  
羽をあらへ泣る鳥もいよけり  
契てや常ありぬこちをわすはらん  
神ある所よかよふ遊ふく遊  
よそ目よハおもふ中とやいなれりし  
ひとりくくよ初ぬる夜のとこ  
遊きつきし人ハいほく乃あり枕  
とハ、や月よこ遊るおく山



秋ことは其あたましハ道もなし  
を那を心ヲわくはミカ木野  
志々りあふ木のした露ヲ立ぬきて  
むすひもあふぬこつろす、しさ  
住あきて身も志つ可あはぬの寺  
夜ふあきかぬそあゝもよほ中  
かく鳥を空音子なせはこえそひて  
やゝめあゝあハわかき遊く人  
かきりあろ道ならハなとむまはろ人  
水もあふらげ火もあえよけり

かきためしもくはをなとけ又ひきて  
きよきあきすこのは松可せ  
月あろき雲あをあつやあたふろ人  
枕のうへハあきあきの霜  
志く袖の露もたまらば野ハ枯て  
あき遊くそちハさゝそよくまど  
とふゆろし此一娘し子名やたゝん  
なまはハ何を身ヲ思ハまし  
面影もよしすハ今ハとまるなよ  
あゝこあとしそろつりもて遊く



山鳥也おろのちつ唇ふりそひて  
登よつるみねも志るきうた雲  
三笠なる宮居よひとし鹿嶋あし  
神也あまよみかけむあふらん  
祢あふてぬ心ハ人よさよはらて  
身そしよしへよあふたあり行  
老木さへち那ハおもひやなるあふらん  
おほろちやまは風のよけさ  
志う雲よ春のぬらとの夜ハ明て  
舟こく海よ月おつるあけ

わされめやこはすくの江の秋の暮  
なを手向をけ無路多ことの本葉

此百韻ハ將軍家の御會にはしめて  
めしくハへられ侍し時五春秋六歳春日の  
末社左廂の御前に新念の事  
ありて彼御社の名を発句此中に  
かくして手向侍しを程へて後  
獨吟の功を三時に終侍しもおほよそ  
この神子いのり申事いさゝあそり  
よしある事に存ん



いよしやうしれ冬つり雪あられひ  
まなきころ月のけ星のひり  
もたどくしく夜ふ可き松竹い  
きさへあこやかなるぬあさなふ  
まさえとをりあき<sup>き</sup>遊く可けれよも  
我れま<sup>ハ</sup>海<sup>ハ</sup>の夢のかよひもたえを  
つはころいゝねし夜可あといぬ  
やうなさはあは人発句を  
うちすんすると見えてめさめぬ  
すなハち下句をほき侍しをおもへハ

はあなしやこのみちにかるゝものかゝる  
夢見ることは海奴の事とおもひな  
からもさすうなさを起かこくは侍  
れとちかきとしころハ世のうき  
かしもかきりなきにうたそへみ  
至風いや、しく<sup>て</sup>あとの葉草  
いろおとろへあゝろのた初もくたをて  
ぬきハおもひは、けんも物うくて  
あき行はと二年くれ春可へり  
あきさへなるをすきぬよハひすて子



いよし 逸もまれなるとし子あた  
まはるし 乃神さめあ、ろほそくて  
<sup>萩</sup>のをと 鷹のなまに <sup>にも</sup>もよ不する、袖  
のうへ 登らんか 毎なした、おもふ事とハ  
ふんせかたひのいそきありさは  
ハいろ一い神下はあり申も  
せま不しきを手向る物又な子こと  
哉ろいと心多ぬさるとり阿  
逸をあしあし 此二句子法、馬  
そ登てはよはんとち此志るへ

よもとおもふ心志る形り

夢想之連歌

住吉乃松こそみち此志るへなれ  
と哉里をの、雪の加ゆるき 宗祇  
舟よすは濱への真砂月きえて  
こゑもむろく千とりあくあり  
あゝ門のいな葉色付おく風子  
かまほをあちみす、きちるころ  
暮ぬるき露片かよ <sup>い</sup>路跡みえて



いく程の霜を見るもすさはし  
ほこ地のあね子目覚ていつる夜子  
あつまは登とり人や詠ぬらん  
たきとなくすゝしき月子こゑ深て  
水子そやまは出ゝ流をぬしは  
風をたゝ花はうとえれよしは川  
なかくもあハるぬるきとのはる  
つきてあし地きりも鴈は別ち子  
うか登る雲は世をへたのまし  
道あちぬ身ハわひぬるもはうからて

よしぬりぬともかゝほよもきぬ  
うつろへハ露こそ月のこゝにをき  
阿きは屋まみや旅をわかれん  
なく鹿子わかつま戀をなくさめて  
あなきらめやはゆふへあ子うし  
さけこやハたのめし事はあゝあらん  
うらえしあゝ流ええもこそすき  
あえおあゝおもかにあか人もあし  
やまけある身もよそ目成けり  
水を友山をとなりの草は庵



夜ふりき霜子川可せそぬく  
多つをしの跡をうきねのこゑ抱て  
ひとりや月の遊くゑをもとん  
わかさちむ秋は空可ハまであはし  
いさや伊乃ちの後の遊めつ遊  
草の原名こりあやれぬ人もかた  
さくらさ地り里そぬりゆく  
たちなれしかりを片あゝ野春くれて  
あり可やいつちきいゆふくこゑ  
雪あふさかやむ外山のあきあとい

伊吹おろしそあゝあゝこれる  
舟あゝ夜中二月ハかゝぬきて  
まつ子深てのほしあひやうき  
あきをち起り暮をたのむもいたつち子  
猶いつまでうおもひあゝあし  
かりの身をはしめあきせりうけ初て  
誰をうらやと誰をくふさ草  
さかぬ木も時しる花の一さかり  
山ハとゞりのはるあゝあし  
霞こくあまはつり舟遠き江子



は乃おれなしをみよやハミむ  
とくわいり月まいそくな天つ雁  
こ萩うつろふい初<sup>よ</sup>あてのさと  
まなるな。身<sup>よ</sup>今より此秋の風  
夕こえくきは山をのさなる  
ふりそむる朝の雪子駒あへて  
かま野をとぬハた、宮こ人  
やふしわかすともめハ梅や花もむ  
あせたるむらの春さむき可け

ひるかこふ軒はれ可す衣可せ  
山子も身こそかくしわいぬき  
おもひあつひとへ心よ世裁い如  
あさきをきくも法あらずやハ  
よされ人毎万ッ程の水もあし  
をろ、もいてぬさきこれの屋と  
月そろき雲片しつこよ<sup>ふ</sup>けぬらん  
夜ハひや、可よ不とりとふそ姓  
萩子風いたねおもひのこいへして  
夕のそらハい可よ志れなむ



待うかれ我や遊むのど地也へよ  
見えはや人もあゝろなきよし  
山里花をあらへさま折るひて  
あつゆよ又もあきぞくともハ  
た、になどあゝら春日をつくあらん  
祢覚する夜のうつるあみおし  
音きけハよき此時雨を枕りて  
くもらぬ月よ物おおもひそ  
あらしすハ宿るやいとむれへの秋  
むしのいろくくくされてそなく

侍いつる風のととえは露をきて  
志不迷もやましを舟さす袖  
おりあつをおもへあしわらわさふ世や  
こひちよいりてあかゆあゝろそ  
世やハうき誰うらめしき人あらむ  
おいをなせめそあゝ世ささるえや  
秋ハ時雨冬ハ霜夜よふし弓ひて  
木葉ふりさくあつつきのないん  
かゝさひし嵐や月よのころとん  
山さむ美も松むしそなく



よるのしもあらしすく可き秋ハきて  
人のあゝる此に遊ら夕くれ  
よむ哥やあを身此うきを種あらん  
おもひをのへハ物あどにあり  
さく花のあゝハと遠くあすむ野よ  
なやしを志めてすめは乃と氣さ  
きかしたゝ春はいくあ此の秋のをと  
あゝりもあけと氣そはああき  
ともしするかゝ山川の鶴のひ舟  
水よ玉はやしあくは夏夏の夜

さゝあゝやこゑくゝあれみおりはへて  
まの風あちぬ柳ちほの氣  
露とされ日くらしなきてのこる日よ  
身にしむ色ハたゝ秋のそ姓



本式連歌

何人

ひるしけふ松々おもハむ老の春(果)  
 おめり不る野花わかおほむころ  
 山きハ乃澤水と流く雪消て  
 く鼓、や今ふりむるひなるさと  
 たらすむを我やとりとはいそくらくん  
 ありろ花あるは旅子見まほし  
 をなすてやありぬを月子あくさめて  
 ころもろつ夜花可勢あふ不りそ

あまゆやハなく花まくらハやあかさん  
 阿し登ふかも花霜はらふこふ  
 志川ウラなるあられ流すむく日ハ暮て  
 うる登る雲乃そら花を可なき  
 ゆきとはるかき玉ハ誰もあふぬ身子  
 と埃く地きろあとし月の光衛  
 いまこむをき可はをそきもいあ、せん  
 ゆありにさへそおもひうあるく  
 花ちうに風ハよハるもろきも花を  
 やまはあすこふかぬひ、くをと



はるかある嶺のともし火可け深て  
月ハたまひあゝるをむらん  
秋をあきと志きる計ハおひきせよ  
ゆふ魚を弓くハよゝおきのこえ  
たのめをく露共道志は跡もなし  
あきやハあき人ハうくとも  
友ハよのよからんこそはちきりあれ  
とすきはさはくこのうたの鳥  
雲風ハ春ハ心のさそはきて  
こえぬやまあき花のあらまし

みよし野をわかふる里としつかみん  
見やこもろき身魚たぐそある  
おさまらむ世をもちらぬハ命にて  
いくさの場もたゝあき共露  
風わらるよもきる月のあろき野よ  
むしの音よあくさ夜ふくは空  
うら見やハあゝへは人のわかさるん  
おもひあらすはこひもあはれや  
いよはらにふさむもいまはつらあらて  
あさまのけかりむ跡も共こさし



ニウラ  
いほくにのみるめもゆゑんかしの嶽  
きえしまもなく法もるちの雪  
吹あハリたゆめは風の又さえて  
冬を可あしむるひ人の庵  
はるも猶あふとも我身いゝあらん  
なまこし花そとしもほくあき  
見とりそふ木ハハハ、苔を色なきや  
水ゆくやまのあきぬあきころ  
猿さけふ岩のありぬし月おちて  
夜ハあけわさる霜はのけをし

跡とめぬ夢とや雲とわかるとん  
たツハあそのおと影そらき  
あちきなくらすきし人子たえとせて  
たあひさほるゆか登あるらむ  
ニ  
ふる郷子きてハう地なくふと、きや  
おもへをむ可し氣もそ寒しき  
か、きとはいさめさりつる身越すて、  
あ、ろをさふもむあしくやせむ  
春をへて花ハうらみぬあさ地ふ子  
わあやとあらは月なす見そ



袖にぬるなと一夜をあるしあり  
友とやきあむ千鳥なくなり  
山のけ乃雪化あへる舟さして  
雲さへさひしくれふるき空  
秋としもいなきぬや身化るきなるとん  
る露けさは草木にもみは  
風つらきまくとり野へを今朝分て  
夢もいたひの道はとふとん  
三  
ゆくハさそおもひゆるらうの山  
せきハありとも心へたつな

くるしとはなけあさるへき人めあは  
あとなくてこそはてまなしけき  
るにあらしよハひのうちもいあうん  
かさあく月化あふのむら雲  
をん時雨あくれもあへは秋深て  
まらうはみちあつる地り行  
野分つあろこそ山もあハきなれ  
きりさむけなる川つらのさと  
わたしもり誰まされていそくとん  
身ははくあとも人ハおもハし



慙せよとなりこし世可ハうとむなよ  
あ、後とみちほろそほあへる

四

雪乃夜のゆかつけ鳥に山おえて  
あくはもふかしふ木たてはあけ  
瀧なと不夢ハいくたひあへるらん  
おもひ志つめぬあせの志と庵  
いとへとも身ハよ、地りのうちみして  
古々路おとても世をゆづくさん  
玉のをのたゆるをまてハあやまくに  
きえぬものありあはしれ、露

はあきよきあひくハありに風みえそ  
月子不乃きくをのりのこと  
ね覚せぬ人ハあをれをいつあらん  
うきをわおすハあ、らならめや  
と魚あしお雨う地あすむ窓のまへ  
おもひくうせろやるきとめはる  
た、いまあみよとや花ハあ不るらん  
野へハサありれ秋あせのあろ  
かり衣こ鷹てにさへ露分て  
あさぬむとち不駒そいなふる



うち出ていしくしくむうふ瀬をひろく  
すめはやししくせきよき山とつ

宗祇 花押

昭和十四年十月二日尊經閣文庫に於て邦字の  
許容を得欣然として老毫を呵し同日之を終  
了せり

残  
公初

誌

三十年のおもひ木犀香を傳ふ





跋



宗祇法師自著の句集たる宇良葉は、未だ世に顕はれず、學界に識られざりし尊經閣藏の稀書なりし、

余が是を物色し始めたるは、明治四十一年加藩の鴻儒津田鳳卿先生著石川訪古游記の一節、

憶昔山河氏、世為富樫家宰、参河守嘗招種玉老人宗祇于其第共賞芙蓉相唱和、事見飯尾宗祇宇良葉集風流遺韻馨人齒牙、

を閲したるに基因す、爾後執拗に搜索し、頑強に精探するこゝと三十二年、今茲九月三十日尊經閣に憧憬の本書を閲覽し、恍惚たる歡喜唯夢境にありて、鈔写の功を終へ、往年本書搜索に質疑を鈔せる斯道の権威福井老博士と伊地知先生の



寛に入北俱に同慶に没りたり、即ち茲に宗祇歿後四百五十年を経て創めて宇良葉へ世に蘇生し學界に顕現したる者なり、故に此写本は實に歴史的意義ある書冊たり、

余の鈔写は先づ直前伊地知先生尊經閣に於て偶然宇良葉を囁目せしむる、三十星霜毫も目睹に觸れざりし本書が殆んど時を同くして看得されし奇蹟は、かゝる一書と雖其隱顯出沒に微妙の機運の存するを、乃ち逆睹すべからざる此奇縁に鑑み、伊地知先生を勞して尊經閣の原書に就き校合を請ひ以て同辰同觀の實を全ふす、この過程におゐて先生の嚴密なる校正を得、余の鈔写せる本書は完璧となれり、

こゝに國文學に新彩を加へ、國史に光明を與へんとする

宇良葉の出頭は、一に鳳卿先生の忠實なる筆致と、前田家が稀書收積の無尽藏なる賜にして、無名老耄の一僮夫の余が分外なる希願を達成したるは、天志を憐み數を仮して、頑健搜索の務に服するを得せしめたる恩恵に外ならず、この深き感激に奮起し老筆を驅り數部を力写し之を頒ちて以て宇良葉存在発表の記念となす、

秋の陽の宇良葉の露にきらめけ玉

昭和十四年十月中浣於金城鼓樂街心香草屋

七十三叟

館

残翁識





謹呈

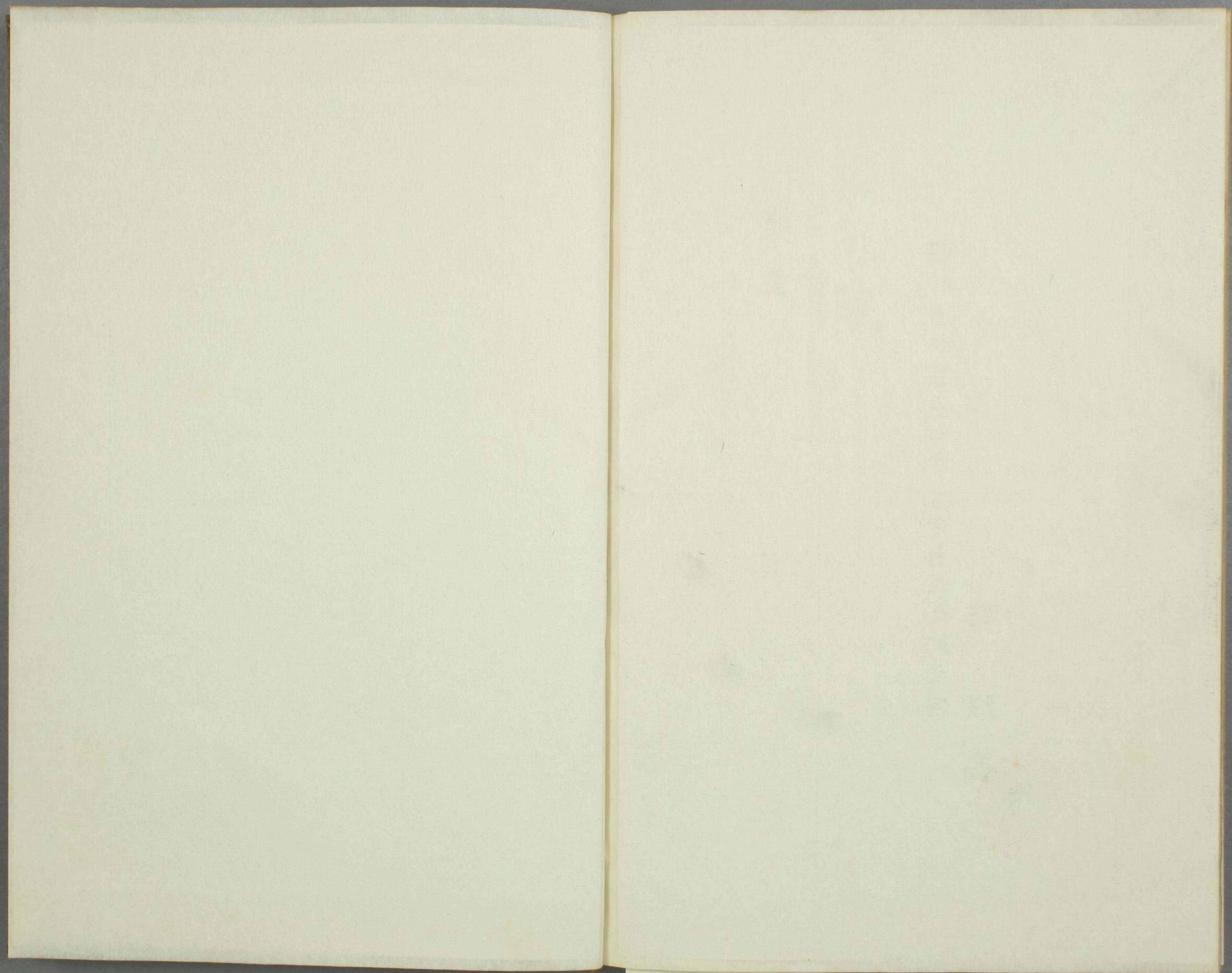
伊地知先生

昭和十四年十二月三日力字七部之内

館  
残









無一亦二樹六聖國揮口十四十九日十第



